

## おもろ時代のカ変動詞

中 本 正 智

動詞の「来る」の活用は、カ行変格活用として分類されている。この活用は現代日本語において、

未然 連用 終止 連体 假定 命令  
こ き くる くる くれ こい  
ko ki kuru kuru kure koi

のように、オ段、イ段、ウ段に活用し、これは奈良時代においても、

こ<sub>o</sub> き<sub>u</sub> く くる くれ こ<sub>o</sub>  
ko<sub>o</sub> ki ku kuru kure ko<sub>o</sub>

のように活用し、規則活用の四段（もしくは五段）や一段、二段（もしくは一段）活用と異なっている。

「来る」の活用が、時代を通じて変格としての性格を変えずに受け継がれてきたこと自体に、不易的な性格の一面をみることができる。もっとも最近では、列島各地で一段化の傾向を示し、不易性が失われつつあるようにみえる。

この語は、日本語の中で歴史を異にして発達してきた琉球語においても、

ku tʃi tʃun tʃu:nu kure: ku:

のように活用し、これを四段動詞の

kaka katʃi katʃun katʃunu kake: kaki

と比較してみると、やはりカ変動詞としての性格は変わっていない。

琉球列島は十四世紀頃から中国との交易が拓け、その経済的背景によって王国ができ、十五世紀頃には奄美から八重山までの琉球列島に一つの文化圏を築いていた。これを琉球文化圏と称するようになったが、そこには他の日本列島と異なる文化が息づき、言語においても日本語と同族であるにもかかわらず、通じないほどの体系をもった言語として独自の発達を遂げる結果をもたらした。この琉球文化と言語の姿を具体的にみせてくれるのが「おもろさうし」である。

「おもろさうし」は十五世紀前後の古歌謡を、1531年、1613年、1623年の三回にわたって集録、編集したものである。全歌数1,554首であり、当時の文化と言語を知る上で重要な資料になっている。この歌がつくられ、謡われていた時代をとくにおもろ時代と称することができる。そこでおもろ時代のカ変動詞がどうなっているか、「おもろさうし」の中から具体的な例にあたって考

察することにしよう。

未然形

まず未然形として、どのような形が用いられているだろうか。

一 きこゑ中くすく（聞こゑ中城）

かみの、も、ちやらの（上の百ちやらの）

おもて、さうせて、こうは（思て想せて来うば）

いしと、かねと（石と鉄と）

あわちへす、もとせ（合わしてこそ 戻せ）

又 とよむ中くすく（鳴響む中城）

（二—47）

中城は、中城湾を擁して貿易に便のよいところである。座喜味から中城に移り、中城湾沿岸を支配した護佐丸の居城であった。石を積み上げた築城は美しく、琉球建築史上で重要な文化財となっている。今では城壁だけが残っている。中城は、琉球王国の中心である首里からみれば、北部一帯の豪族をにらんだ守りの城であった。このおもろは中城を讃美したもので、堅固な城のようすを謡ったものと理解される。つまり、北部一帯の武将たちが何かを企んでやって来たならば、堅固な石の城壁と鉄の武器とで撃退するのだ、すばらしい中城よ、と謡っている。

「こうは」は、未然形のこに、助詞<sub>u</sub>がついた形で、多くの武将たちが何かを企んでやって来たならばという仮定条件を表している。

<sub>u</sub>が已然形に接続して条件を表す「くれは」（来れば）もある。おもろ時代の接続助詞の<sub>u</sub>は、「こわは」（乞わば）、「こゑは」（乞えば）、「せは」（為ば）、「すれは」（為れば）のように、未然形と已然形に接続して条件を表しているが、現代方言では已然形接続の形に傾いている。「こうは」は、ko:baであったと推定される、未然形の ko: は、奄美大島南部の方言に現代でも残っている。コバは多くの方言で ku:ba になっている。

連用形

連用形は、接尾辞がついて、いろいろな派生形をつくる。ここでは派生形をみるより、連用形としてどのような形が用いられているかをみることにしよう。

一 あんの、つのけたち、（吾のつのけたち）

あんの、おやけ、たち（吾のおやけたち）

こゑくの、てた (越來のてだ)  
たるてす、きちやれ (頼んでこそ来たれ)  
(以下略、二—83)

このおもしろの「こゑくのてた たるてすきちやれ」は、越來の按司にお願いして来たという意であり、「きちやれ」はキタレにあたる。「き」が連用形で、これに完了の助動詞タリの已然形「たれ」がついた形である。連用形は「き」のほかに次のようなものもある。

一 こゑく、世のぬしの、 (越來世の主の)  
わしの、みね、ちよわちへ、 (鷲の嶺ちよわちへ)  
いみやからと、こゑくは、 (今からぞ越來は)  
いみきや、まさる (いみ氣や勝る)  
(以下略、二—79)

「ちよわちへ」は、連用形のキにオワル(給ふ)がついた形で、「ち」(來)と「よわちへ」(給いて)に分析される。「ちやうわちへ」(來給いて)と表記されたものもある。連用形のキが口蓋化して「ち」となっている。

一 きこゑ、よんたむさ、 (聞え読谷山)  
おしやけ、み、あくて、 (押し上げ見あくで)  
たりす、はりす、ちやれ  
(だにこそ走りこそ来たれ)  
(以下略、十三—813)

「はりすちやれ」は、走りコソ来タレにあたり、走って来たののだの意である。「ちやれ」は、キタレにあたり、さきの「きちやれ」と同じ語である。キが口蓋化して脱落した形である。

このような例から、おもしろ時代には、連用形は、「き」と口蓋化した「ち」が用いられ、さらにこれが脱落した形もあった、という三つの層を認めることができる。つまり、ki と tsi と、これが脱落したものがあつたと推定される。

#### 条件形

条件形として未然形に助詞バが接続したコバにあたる「こうは」があつたが、このほかに已然形に助詞が接続したものもある。

一 なおち、きよが、 (直ち人が)  
しよりかち、くれは、 (首里から来れば)  
しま、ひろく、 (島広く)  
くにひろくちよわれ (国広くちよわれ)  
(以下略、五—266)

このおもしろは、国中をまわっているおもしろ歌人が首里へ来たならば、島々国々を広くしておいでになるという意を謡っている。

「くれは」は、已然形に助詞がついたもので、クレバ

にあたり、kureba であつたと推定される。現代方言では、kuriba, kuriwa, kure: などという。

同じ形が、補助動詞的に用いられ、「つくちのしゆの いふちへ あかてくれは」(津口の潮の息吹ちへ上がてくれは)(九—505)の例もある。

#### 命令形

一 きこゑ、きみかなし、 (聞ゑ君愛し)  
てもち、なわ、ぬへわちへ、 (手持ち繩綯へわちへ)  
またま、ゑらて、よてこう、 (真玉選で寄て来う)  
ぬちへ、みおやせ (貫ちへみおやせ)  
又 とよむきみかなし (鳴響む君愛し)  
(以下略、六—302)

このおもしろは、神女が祭場へ出現するところをはやしているもので、神女さまよ、玉を貫く糸を綯い給いて、真玉を選んで貫いてあげよう、寄っておいで、と親しく呼びかけている。

「よてこう」は、「寄リテ来」にあたる。「こう」(来う)は命令形のコにあたり、ko: であつたと推定される。現代方言では、ko: は奄美大島南部の古仁屋を中心に広がっている。

命令形の用例は、このほかに、

も、うら、よてこう (百浦寄て来う) (七—355)  
まへに、かち、よてこう (前へ寄て来う) (十一—571)  
そいに、かち、よてこう (側へ寄て来う) (十一—571)  
やわやわと、おちへこう (柔々と押しへ来う) (十三—801)  
よてこう、物しられ (寄て来う物知られ) (二十一—1395)  
まゑに、かち、よてこう (前へ寄て来う) (二十一—1409)

などがある。「おちへこう」(押して来い)のほかは「よてこう」(寄って来い)であつて、これは常套的な表現となっていたようである。

#### 終止形

連用形がもとになって、これに「居り」がついて終止形をつくる。奈良時代のク(來)にあたる終止形はない。

一 おもしろ、ねやかりや、 (おもしろ音上がりや)  
いみやと、世は、まさる、 (今ぞ世は勝る)  
てかねまる、 (治金丸)  
しまかねて、きより (島かねて 来居り)

(以下略, 八—420)

「しまかねてきより」は、島を外部から守っているという意であり、「きより」はキヲリ(来居り)にあたり、kijori であったと推定される。ここでは継続の意をとどめている。奄美大島の名瀬一带にある kjuri はこの形にあたる。現代方言の首里一带にある終止形の tʃum (来る) にあたる形は、キヲム (来居ム) であり、おもろ時代の資料をみても管見に入らない。

一 しより、おわる、てたこか、  
(首里にいらっしやる太陽子が)

おや、みふさ、つかよわ、(親御準使よわ)

おや、みふさ、きより、て、しられ、  
(親御準来居りとして知られ、)

(以下略, 十三—886)

この「きよりにて、」は、キヲリトテ (来居りとして) にあたる。伝聞を表す助詞トテ (といて) の前の動詞は終止形がくる。「きより」は、継続の意味もあるが、親御準という船が来ると報告しなさいの意であるから、現代方言の終止形 tʃum (来る、来居ム) に意味が近づいたとみてよいであろう。

「きより」(来居り)の第二次派生の活用形である「きよる」(来居る)、「きよりにて」(来居りにて)、「きよれ」(来居れ)などの形がみえる。

一 なこ、さかい、(名護酒)  
おや、さかい、きよもの (親酒来居もの)  
おやちやうあけて、(親門開けて)  
わん、いれ、(吾入れよ)

(以下略, 十七—1180)

「おやさかいきよもの」は親酒が来ているのだからの意で、「きよもの」はキヲモノ (来居もの) にあたる。モノは「…だから」という助詞的な用法をもつ。目前に来ているのだからの意である。

キヲモノにおけるキヲ (来居) は、チェンバレンのいう下略形にあたり、ヲルの活用語尾のルの部分が見れない形である。これは一種の連体形とみられるものである。

終止形のクにあたる形はないが、ただ地名として「越来」があり、「こゑく」と表現されているが、宛字であるから、この「く」は扱わないことにする。

連体形

一 せたか、おわもりきや、(精高おわもりが)  
おれて、ふれまへは、(降れて群れ舞へば)  
しま、かよて、くる、やに (島通て来る様に)

(以下略, 十六—1131)

「しまかよてくるやに」は、島を通ってくるようだの意で、「くるやに」は、クルヤウニにあたり、クルは

kuru と推定される。これは連体形と認められ、「居り」が融合しない形である。クルヤニの形は現代方言では用いられなくなった。

一 こゑく、もり、みや、あければ、  
(越来森見上げれば)

あか、なさか (吾が父が)

ちよわより、もちろちへ、

(来よわよりもちろちへ)

こかきよる、きよらや (此が来居る清らや)

(以下略, 二—84)

越来森を見上げると、吾が父がおいでになって輝いていらっしやる、その方がいらっしやる姿の美しさよ、といった意である。

「きよるきよらや」は、来居ル清ラハにあたり、いらっしやっている「姿」にあたる名詞が省かれている。「きよる」は、居りがついた新しい派生形の連体形である。

接続形

連用形に接続助詞のテがついて接続形をつくるが、おもろの例をみると、

一 さしきから、もたいきよ、(佐敷からもたい人)  
きちゑ、やちよ、しらよきやは、  
(来ちゑ八千代白雪は)

おきやかもいに、みおやせ、

(おぎやか思いにみおやせ)

ね国から、もたいきよ (根国からもたい人)

(以下略, 十九—1287)

とある。「きちゑ」は、キテ (来て) にあたる。表記として「きちへ」もみえる。いずれもテが口蓋化していて、kitʃe であったと推定される。現代方言の ttʃi と比べて、第一音節が明瞭に保たれている点が注目される。

おもろ時代の力変動詞「来る」の活用形をみてきたが、これを表にして示すと、

(i) 未然形	連用形	条件形	命令形
	き	こうば	こう
	ち	くれば	
(ii) 終止形	連体形	接続形	過去形
きおり	きよる	きちへ	きちやれ
	きよ		
きより	くる	きちゑ	ちやれ

のようである。

申叔舟の「海東諸国紀附録」の「語音讎訳」(1501年)をみると、

命令形	接続形	過去形
ku	kittʃe	tʃanga

に近い語形を表記したと思われるものがみえる。命令形の *ku:* が *ku* に変化していて、接続形のキテのテの部分が口蓋化し、過去形のキタリにおいては語頭が口蓋化して脱落している。これらから推測するに、おもろ時代より少し新しい形になっていたと考えられる。

現代首里方言をあげると、

(i) 未然形	連用形	条件形	命令形
<i>ku:</i>	<i>tʃi:</i>	<i>ku:wa</i> <i>ku:riwa</i> <i>ku:re:</i>	<i>ku:</i>
(ii) 終止形	連体形	接続形	過去形
<i>tʃu:n</i>	<i>tʃu:ru</i> <i>tʃu:</i>	<i>ttʃi</i>	<i>tʃan</i>

である。*tʃu:* は *tʃu:ʃi* (来るもの) という下略形にあたるものである。終止形はキヤリ系がなく、キラム系である。

結局、おもろ時代のカ変動詞「来る」の活用について、その特徴をあげると、

- (1) 連用形のキが口蓋化して、*tʃi* となっていた。
- (2) 未然形と命令形は「こう」であり、*o* 母音をとどめ、まだ *ku:* になっていなかった。

(3) 条件形として、「ば」が未然形にも已然形にも接続して、二形をもっていた。現代方言では「ば」が *wa* になっている。

(4) 終止形として派生形のキヤリ (来居り) が用いられ、まだ継続の意を表していた。現代方言ではキヤリ系がなく、キラム (来居ム) にあたる *tʃon* だけである。

(5) 派生形キヤリが活用して第二次派生語をつくるが、連体形はキヤルにあたる「きよる」と、「きよ」を用いる。現代方言の *tʃu:ru* と *tʃu:* にあたる。

(6) 本来の連体形クルにあたる形が「くるやに」(来る様に) の中で用いられている。この形は現代方言では見られない。

(7) 接続形のキテにあたる形は、テの部分が口蓋化して、*kitʃe* となっていた。現代方言は口蓋化が深化して *ttʃi* となっている。

などである。

本論は、「琉球語のカ変動詞「来る」の活用——その分布と歴史——」(『人文学報』昭和61年度) と関連して執筆したものである。参照されたい。

## 古文問題の出題について

——ある入試問題を例として——

川 嶋 秀 之

小稿では、最近瞥見した高校入試問題のうちからひとつの試験問題を取り上げ、問題の出題の仕方に関するさまざまな問題点を考えてみたい。

まず、以下に某県の県立高校で出題された古文の入試問題を掲げる。ひとつ腕だめしに解いてみられたい。

次の文章を読んで、下の(一)～(三)の問いに答えよ。

\*1 白河院の御時、九重(くわい)の塔(マツ)の金物を、牛の皮にて(金属の飾り物)

作れりといふ事世(こと)に聞こえて、修理(しゆり)したる人、

\*2 定綱朝臣(さだつなのみこと)、事(こと)にあふべき由(よし)聞こえたり。仏師(ぶつし)な(勤せられるであろうということが)

にがしといふ者を召して、「たしかにまこと空(くわ)とを見て、ありのままに奏(まう)せよ」と仰せられけ(申しあげよ)

れば、承りて上りけるを、なからのほどより帰(かへ)り降りて、涙を流して、色を失ひて、「身のあれ(身が無事である)

ばこそ君にも仕へ奉(たてまつ)れ。肝心(かんしん)失せて、黒白(くろはく)見え(真偽が)からこそ

分(わか)くべき心地(こころ)も待(まち)らず」と言ひもやらずわなな

きけり。君きこしめして、笑はせ給(たま)ひて、こと(お聞きになって) (格別)